福井県立美術館 2017

美術館だより

MUSEUM NEWS Vol.153

contents

〈展覧会紹介〉「開館40周年特別企画展　県立美術館名品200選」展 [2～3]
〈イベント報告〉「岩永勝彦の世界　福井の洋画」 [4～5]
ほかにもいろいろ40周年、平成28年度新収蔵品紹介 [6]
蔵出し講演会記録「横山操と私」加山又造（前編） [7～8]
次回展覧会のお知らせ [8]
美術館喫茶室ニホ

表紙：菱田春草「落葉」（左隻部分）　1909年（明治42）　当館蔵

福井県立美術館 開館40周年記念

名品200選

平成29年

7.7金▶10.22日

［休 館 日］7/31、8/1、8/28～9/14、9/19・25、10/2・10・16
［開館時間］午前9時から午後5時（入館は午後4時30分まで）
［観 覧 料］一般・大学生 500円　ワンコイン・パスポート（期間中何度でも観覧可）
高校生以下無料
※20名以上の団体は2割引き
※障害者手帳等をお持ちの方とその介助者1名半額
［主　　催］福井県立美術館
［共　　催］福井新聞社、福井放送

福井県立美術館は昭和52（1977）年の開館から、今年で40年を迎えました。そこでこれまで収集したコレクション約3000点のなかから、選りすぐりの優品約200点と、特別出品の近代日本画の名品約50点を一挙公開します。〈伝統の継承〉〈革新〉〈発展〉をキーコンセプトに、4つの展示会を前・後二期で開催、400年にわたる日本美術の潮流を体感していただきます。

◎前期

7.7金▶7.30日

夢の競演 院展の巨匠たち

革新1

近代日本画の“革新の変遷”を、滋賀県立近代美術館の名品と合わせて紹介します。

速水御舟「菊花図」（左隻）　個人蔵（滋賀県立近代美術館寄託）

菱田春草「落葉」（右隻）

8.2水▶8.27日

伝統の継承

江戸美術を、中世からの“継承”と明治期への橋渡しの役割に着目し紹介します。

百花繚乱 江戸の美術

岩佐又兵衛「三十六歌仙図　小野小町」

野々村仁清「色絵牛図茶壺」

スペシャル・プログラム

1.土曜美術館
◉入門・はじめての名品鑑賞（要観覧券）
会期中毎週土曜日　午後2時～2時30分
9／2、9は展示替えのため休館。9／16、23は講演会のため中止。
◉マッキー先生のおやこ鑑賞クラブ 要申込（要観覧券）
7／15（土）、7／29（土）、8／19（土）各回午前10時～12時

2.キッズミュージアム 要申込
（参加無料。付き添いの大人は観覧料100円引）
◉美術館の舞台裏ツアー＆絵巻日記を描こう
7／22（土）　午後2時～
◉アニメや映画の原理が分かる?!
～回転のぞき絵（ゾートロープ）をつくろう～
8／12（土）・14（月）午前10時～、午後1時～（1時間程度）

3.大人のためのアートな夏休み（参加無料）
◉屏風「落葉」バトルトーク 滋賀vs福井
7／23（日）　午後2時～4時
◉クリ・ヨウジ　アニメーション一挙上映！
8／5（土）　午後3時～4時30分
◉短編人形アニメーション上映会
8／11（金・祝）・13（日）・14（月）
各回午前11時～12時、午後1時～2時
◉お盆はユカタでGo！ユカタ＆着物は観覧料無料
8／11（金・祝）～15（火）
◉マイ名品バックを作ろう　要申込
8／19（土）　午後3時～4時
◉ミニ屏風を作ろう
10／14（土）　午前10時～11時

4.講演会
◉「横山操先生と私」（仮題）
9／16（土）午後2時～3時30分

5.関連イベント
◉NHK 8Kスーパーハイビジョン・シアター
8／12（土）～27（日）
～究極の映像と音響で体験する名画～
◉美術館喫茶室ニホ
トークサロン、
「県立美術館名品200選」コラボメニュー等

一挙大公開

コレクションが魅せる日本美術の400年 伝統・革新・発展

7.7（金）▶8.27（日）

Ⅲ 発展

戦後、多種多様に“発展”する現代美術の姿を紹介。
あわせて西洋人気作家の版画の名品も紹介します。

現代アート大絵巻
変幻自在

小島信明「無題」

宇佐美圭司「円形劇場・底抜け」

◎後期

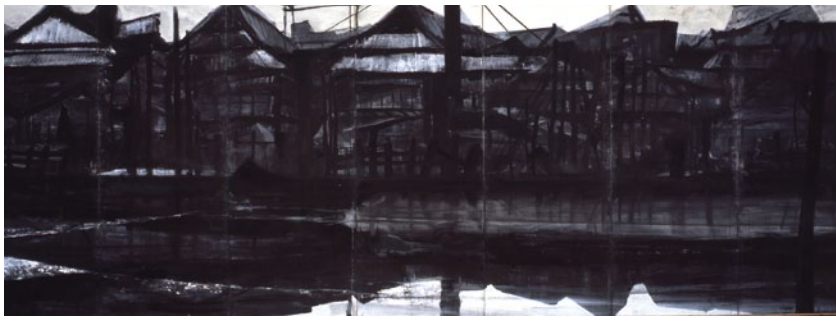
9.15（金）▶10.22（日）

Ⅳ 革新2

近代日本画を刷新した戦後の“新たな日本画”の流れを紹介します。

日本画への挑戦
破壊と創造

三上 誠「F市曼荼羅」


横山 操「川」

《イベント報告》

福井の洋画

岩永勝彦の世界

6/3[土]▶6/25[日]

主 催　福井県立美術館

岩永勝彦「永平寺雲水托鉢」2009年

岩永勝彦「女流し」2005年

岩永勝彦「ちょっと一服」2001年

岩永勝彦「生きる」2003年

岩永勝彦「寅年節分祭」2010年

福井県立美術館では6月3日（土）から6月25日（日）まで、企画展「岩永勝彦の世界／福井の洋画」を開催しました。

福井や関西の忘れ去られた風物や場末の人間模様を独自の視点と独特の色彩で描き続け、昨年81歳で他界した岩永勝彦。本展では、彼のここ20年の近作を中心に、遺された資料等を交え、創作活動の全貌を回顧。また、同時代に活躍した福井の洋画家たちの作品も併せて紹介しました。

本展関連イベント「座談会『岩永勝彦を語る』」等、作家の活動を検証するイベントも行われ、多くの方々にご来場いただくとともに、美術雑誌、新聞、テレビ、ラジオ等のメディアで大きく扱われ、沢山の反響をいただきました。

ご来場いただいた皆様にこの場を借りて、お礼申し上げます。

《関連イベント》　◉座談会「岩永勝彦を語る」　[日　時] 6月18日（日）午後2時～　[場　所] 福井県立美術館講堂
[登壇者] 佐川文子（洋画家）、岩永　純（画家）、西村直樹（福井県立美術館主任学芸員）

岩永勝彦「たそがれ操車場」 1956年

岩永勝彦「桐の実」 2000年（1971年作品の再制作）

岩永勝彦「下見酒」 2000年

路地裏や場末に灯る光 ―独特の色彩と手法で表現

西村直樹（福井県立美術館主任学芸員）

2012年頃の岩永勝彦

1935年福井に生まれた岩永勝彦は、初期より旺盛な制作活動を展開し、大学在学中に森由太郎の勧めで出品した「たそがれ操車場」（1956年）が第2回一陽会展に初入選。同じ年第20回大潮会展に出品した「たそがれの河畔」が大潮賞（最高賞）を受賞するなど、アンフォルメル・アートに影響を受けた大胆な筆致の作品で岩永は早くから注目を集めた。卒業後教職に就き、一陽会展に抽象画の出品を続けた岩永であったが、ある時期、画壇の流行を追って模倣を続けてきたことに嫌気がさし、「まね事は本意ではなく、壁に突き当たった」と多くの作品を焼き捨ててしまう。このあたりを境に岩永は、友人であった稲村雲洞の影響で作陶に没頭、この後数年間にわたって油彩画制作をほぼやめてしまう。骨董収集も行うようになった岩永は、特に古九谷に魅せられていく。そのなかで彼は、「古九谷が何故北陸の地で珍重されたかを考えるとき、風土性から来る嗜好が深く反映しているものと解釈しています。緑、赤、黄、青、紫の九谷五彩の美しい調和と、透明感のある絵付技法を油彩に取り入れることが出来れば、自己の性格と風土性を生かせるのではないかと苦心の制作をしています」と語り、あらためて油彩画制作を再開。この頃制作した「桐の実」（1971年）が一陽賞（最高賞）を受賞する。同作は桐の実のついた木の枝と屋台のある風景を描いたシンプルな作品であったが、この頃より岩永の画題は変化していく。

「酒が好きなせいもあって、私は屋台や居酒屋などをテーマにした絵を多く描いている。

油臭のしみこんだ労働者、初老のサラリーマン、水商売らしき女…。

赤提灯は、抑圧された精神から開放された赤裸々な人間像を、無尽蔵に提供してくれる興味つきないモチーフである」

作家のこの言葉にあるように、彼はよく街に出て酒を呑み、そこでみたものを題材にするようになる。また、「私はよく、チンドン屋、流し、祭事などをモチーフにしますが、次第に廃れていく日本古来の風習や精神を絵で残したい」と語り、そのなかに美を見出していく。

こうした試行錯誤の結果、岩永は、路地裏や場末の酒場に埋没する日常に光を当て、それらを深い緑色と九谷五彩を生かした静かな色彩で描き込むという独特の作風を生み出し、日本人の文化や風土を感じさせる独自性の高い作品世界をつくりあげたのである。

※本文は、寄稿文（『美術の窓2017年6月号』、平成29年6月20日、株式会社生活の友社発行に掲載）を抜粋・改稿した。

岩永勝彦 略歴

1935年（昭和10年） 福井県吉田郡永平寺町松岡に生まれる。
1954年（昭和29年） 福井大学学芸学部教育科一部入学。
1956年（昭和31年） 第20回記念大潮展（東京・東京都美術館）に「たそがれの河畔」出品、大潮賞（最高賞）受賞。
故森由太郎の勧めで、第2回一陽展（東京・東京都美術館）に「たそがれ操車場」出品、初入選。
以降毎回出品。
1958年（昭和33年） 福井大学卒業。
大野郡和泉村朝日中学校教諭となる。
1962年（昭和37年） 福井県立勝山高等学校教諭となる。以後1986（昭和61）年まで高等学校教諭。
1963年（昭和38年） 書家稲村雲洞と二人展「游心展」（福井市・福井放送会館）開催。
1967年（昭和42年） 第一回個展（福井市・品川画廊）開催。
1968年（昭和43年） 古九谷に憑かれ、この頃より陶磁器制作をはじめる。
古陶磁の影響で絵画の作風が一変する。
1971年（昭和46年） 第17回一陽展（東京・東京都美術館）に「桐の実」出品、一陽賞受賞。
1972年（昭和47年） 各団体最高賞受賞作家展（大阪・大阪画廊）に「屋台」他5点出品。
1974年（昭和49年） 六杜会会員となり、六杜会美術展に出品。以降毎回出品。
1980年（昭和55年） 第26回一陽展（東京・東京都美術館）に「秋の譜」他出品。
同年会員推挙となり以後審査員も務める。
1981年（昭和56年） 現代作家精鋭展（東京・ふそうギャラリー）に「嫁いだ日」など6点出品。
1982年（昭和57年） 福井県現代洋画作家展（福井市・福井県立美術館）に「桐の実」他出品。
1985年（昭和60年） 第1回市美展ふくい実行委員を委嘱される。
1986年（昭和61年） 福井県文化協議会理事を委嘱される。
福井県立美術館実技講座講師を委嘱される。
1987年（昭和62年） 福井県教育研究所表現教育課研究主事となる。
1989年（平成元年） 第1回ベナール美術展（福井市・ショッピングセンターベル）「岬の居酒屋」他出品。以降毎回出品。
1991年（平成３年） ふるさとおこし事業モニュメント「曙」（福井市東藤島小学校前庭）設計制作する。
1992年（平成４年） 現代作家精鋭展（東京・風童門）に「輪廻」他4点出品。
福井県立嶺北養護学校教頭となる。
1994年（平成６年） 水彩画個展「福井風物詩」（福井市・ギャラリー・オーグー）開催。
現代作家精鋭展（東京・風童門）に「雨の日」他2点出品。
1996年（平成８年） 福井県教育委員会を定年退職する。
福井県文化協議会評議員となる。
1997年（平成９年） 郷土の作家たち展（福井市・福井県立美術館）に35点出品。
2001年（平成13年） ボジョレーヌーボー アートラベル展（パリ・ドゴール国際空港）に出品。
福井県文化芸術賞受賞。
2004年（平成16年） 岩永勝彦水彩展（福井市・ギャラリー サライ）開催。
2007年（平成19年） 北京国際博覧会に「開店祝」出品。
岩永勝彦展ー酒は人生の友ー（福井市・ギャラリー サライ）開催。
2010年（平成22年） 岩永勝彦新春展ー迎春を喜ぶー（福井市・ギャラリー サライ）開催。
2011年（平成23年） 日本国際切手展（横浜市・パシフィック横浜）に出品。
2015年（平成27年） 一陽会スカラベ賞受賞。
2016年（平成28年） 逝去。

展覧会だけじゃない！

ほかにも いろいろ 40周年

記念ロゴ

福井県公式キャラクター「ジュラチック」のデザイナー、中野シロウ氏監修による、ジュラチック特別バージョンの40周年記念ロゴが完成しました。今後、記念シールや名刺のデザインで登場します。

入口ドアディスプレー

美術館正面玄関入口の自動ドアに、当館の代表作である菱田春草「落葉」をモチーフにしたディスプレーが完成しました。これまでとは一味違う装いで来館者をお迎えします。

平成28年度新収蔵品紹介

当館では平成28年度に寄贈2点、寄託18点の計20点の作品を新たに収蔵しました。

【寄贈】

狩野元昭『源氏物語　初音・澪標図屏風』 6曲1双　紙本着色　江戸時代（17世紀）　森川裕司氏寄贈

本図は『源氏物語』の「初音」と「澪標」の場面を描いた屏風です。作者は江戸幕府奥絵師の狩野安信に師事し、福井藩御用絵師となった狩野元昭（1623～81）。元昭の作品は藩の菩提寺である大安禅寺にかなりの数が残っています。しかし、本図のような彩色によるやまと絵画題の作品はこれまで知られていませんでした。元昭の作画範囲や活動を知ることのできる貴重な一点です。

小牧源太郎『版画集 カリファの幻想』（3枚組）

額装　紙、シルクスクリーン　昭和55年（1980）　清水純一郎氏寄贈

小牧源太郎（1906～89）は、日本のシュルレアリスムを代表する画家のひとりです。戦前のシュルレアリスムの時代をへて、その後は日本の土俗信仰に根ざした民俗学的モチーフの摂取や、独特の宇宙論的世界の探求を試み、独自の造形思考に基づくユニークな創作活動を展開しました。本作は作者の戦後における代表的版画集のひとつで、作者と親交のあった寄贈者が本人から贈られたものです。

【寄託品】

- 重要文化財『刀 無銘伝備中依真』 1口　南北朝時代（14世紀）　個人蔵
- 岩佐又兵衛『越前専修寺言上事』 1通　福井市・法雲寺蔵　　ほか

前編

福井県立美術館 蔵出し講演会記録

「横山操と私」加山又造

昭和55年9月7日(日)　於当館講堂　参加人数200名
「回顧 横山操」展(9月6日～9月28日)
音源デジタルデータ化協力：福井県立美術館ボランティアの会
音声書き起し・編集・注釈：佐々木美帆(当館学芸員)

重達夫館長

横山操展が昨日から開かれています。

この展覧会を開きますのは、当美術館が建設された当初からの一つの因縁がございまして、福井県出身の日本画家を非常に可愛がっていただいた横山操先生がご逝去になった後、未亡人からじきに福井県に新しい美術館が建つのなら横山操の傑作を寄贈しようというお話がございまして、ご存知のとおり今日、御覧願う《川》と《網》の巨大な傑作を頂戴したような次第でございます(注1)。

(横山操の)展覧会はこれで4回目でございます。最初に出身の新潟県で回顧展、それから山種美術館、朝日新聞社の回顧展、今度が4回目ということになります。当初から計画し、ようやくここに実現した次第であります。もちろんその間いろいろと苦労、紆余曲折もございましたけど、所蔵家の皆様の非常なご協力を得、特にご遺族のご好意と、殊にこれからご紹介申し上げる加山又造先生の熱心なご指導で当館の学芸員に色々と方向づけをいただき、今日ここに力を入れた素晴らしい展覧会を開催することが出来ました。

この展覧会には初めて公開される素描、デッサンは30点。発表後、一般に見られなかった作品も6点展示され、4回目と申しましても全く画期的な横山操展になった次第でございます(注2)。これらにつきまして中心になってご指導願いましたのが、加山先生でございます。加山先生の今日のご演題は「横山操と私」で、非常にご多用のなかをわざわざ馳せ参じていただき、親しくこのお話を聞けることはありがたいことです。

加山先生のご経歴については申し上げるまでもないかと思いますけど、横山先生と同様に戦後、昭和24、5年からスタートして横山先生は青龍社を地場に、加山先生は創造美術、新制作日本画部、最近では創画会という風に名称を変えたこの団体に依拠されまして、めきめきといいますか瞬くうちに一気上昇され、日本画の新しいホープとなり、戦後昭和30年前後には奇しくも横山加山の2人が天下を二分したとまでよく言われ、非常な異彩でございました。その先生を親しくここにお迎えし、しかもこのご両者は非常に親しいご親友。始めの間はご交流がなかったのですが、後の方では美術大学を中心にして非常に仲のいい親友であると同時に良きライバルとして相添いながら、日本の将来の日本画を背負って立つという存在でありました。一方は残念ながら53歳の若さで他界になりましたけど加山先生はご健在、親友のためならどんなことでもしよう、ということでこのご多忙のなかを幸いにもお話をいただける次第となりました。横山芸術を知る手だてということを度外視しても、一ファンとして今日の加山先生の講演は聞き逃せない催しかと存じております。我々も自信をもって、特別講演会として皆様にお送りできると感じておる次第でございます。

注1：横山操《網》《川》は当館開館の昭和52年度に初めて寄贈された14点の作品のうちの2点。
注2：展覧会では逝去後、一度も公開されていなかった《闇迫る》(昭和33年 第2回個展)、《岳》(昭和34年 第31回青龍展)、《雪峡》(昭和38年 第7回日本国際美術展)、《高速4号線》(昭和39年 第6回現代日本美術展)等の他、未亡人の元に未公開のまま秘蔵されていた素描やデッサンが公開された。

加山又造

大変大げさにご紹介頂きまして、横山さんはその通りですが私は決してたいしたことございません。まずこんなに天気が悪いのに、私のまずい話にこんなに沢山来ていただいて、考えようによっては申し訳ないし、ありがたいことだと思います。お礼申し上げます。

今日は「横山操と私」ということで、横山さんの大体の辿られた形みたいなものを出来るだけ分かりやすく申し上げたいと思います。

横山さんは1920年、大正9年に新潟で生まれ、横山さん自身が言うところによりますと、大変生い立ちに暗い部分があるというお話です。友達の僕から見ると本人が言うほど暗い生い立ちという感じがしませんが、傷つきやすい少年時代がコンプレックスになって、後にナイーブな面を見せる絵を描く基になっていると思います。

40歳の横山操(1964年撮影)

横山さんは僕の正反対で見かけは体がすごく丈夫で、立派で、背も高かったし、肩幅もがっちりして、決して太り型っていうのではなくて、若いときはどちらかというと痩せ型で、晩年は中肉という感じでした。写真で御覧になったでしょうけど眼は細長くて底光りのする様で、声は低いけれどもなかなかよく通る声で、ちょうど戦国時代の古武士の風格を持った実にいい男でした。

小さい時から不思議なコンプレックスを持ちながら少年時代を新潟の西蒲原吉田町、弥彦山の彌彦神社の下にある町ですけどね。そういう古くて新潟のよい静かな町に育たれるわけです。子どものときから非常に絵が上手かったそうで、随分その町の評判になったことのある人だったそうですね。それで17(14か？)で絵描きになるつもりで上京して、初めは油絵の絵描きに厄介になりながら川端画学校に行った。川端画学校っていうのはどういう性質の学校か僕はよく知らないから説明できないのですけど、今の美術研究所みたいなものじゃないかと思います。それではじめ光風会で油絵を描いて、随分若い時に簡単に入選しますが(注3)、先輩方から「お前は日本画の方が合っているだろう」ということで、日本画を勉強し始めた。

当時、戦前のことですから文部省の主催する官展である文展、横山大観なんかのいた日本美術院、その院展から枝分かれして川端龍子が会場芸術を提唱した大きな塾のような青龍社と、この3つが日本画の勢力、主流になっていたんですね。中でも青龍社は一番型破りで、会場芸術主義で展覧会のための絵を主軸にした発表展でした。ですから横山さんの気質によく合っていたと思います。

とにかく20歳で初出品して、やすやすと入選するんですね。その時の絵の名前が《渡舟場》(昭和15年)って、会場ご覧になると素描でそういう題のついたのが1つありますけど、あの1番古い絵になりますかね、それが入選して川端龍子の目に留まりましてね。「この絵が青龍社と横山君との繋ぎになるといいね」って言われたのが非常に嬉しかったっていうのは僕も聞きましたし、何かにも書いておられます。

それを出した昭和15年の秋が20歳だったものですから入営して、すぐ戦争に行きます。絵を発表して、それがすぐに入選して、自分が尊敬している人の目に留って、励ましの言葉を得て。本当はそこから絵描きは一所懸命勉強して育ってゆくはずですけど、国の情勢というか、国の体制のために軍人になって出かける。それから5年間は中国北支を転々し、当時のウルトラな軍国主義で鍛え上げられるんですけどね。それから終戦になって捕虜生活を更に5年間、シベリアの炭鉱の地底何百メートルで働くんですね。その間、軍国全体主義の逆の社会主義というか、共産主義の基礎を徹底的に叩き込まれる、洗脳される訳です。30歳になってやっと帰って来られるわけですが、それが昭和25年なんです。だから考えてみると青春の一番大事な10年間、20歳から30までの間、一日のうち一秒の自由もない場所で懸命に生きてきた。それで25年に帰ってきて、すぐその後で戦後何回目かの青龍社の展覧会を見るんですけど、その年から展覧会に出品を始めるんです。だから10年間いつも絵が描きたい、描きたいと思って過ごしたんじゃないでしょうか。そして青龍社に春秋出品するたびにあの奨励賞だったか新人賞だったか賞をどんどんとっていくわけです。この会場にも出ていますけど、《炎炎桜島》(昭和31年、青龍賞受賞)という初期の記念すべき、終戦直後の日本画のなかで非常に重要な位置を占める作品が作られるわけです。

注3：昭和13年、第25回光風会展に《街裏》が初入選。

戦争に行かなかったり復員が早かった私ども絵描きは、４年ないし５年は身をもって国内で荒廃した文化だとか美術に対しての考え方を研鑽していたわけだけど、横山さんはそれよりも５年遅れてそれに直面して絵描きとして出発し、数年で戦後の社会、文化の流れ、新しい時代の流れにすぐ即応する。そしてそれを自分流に新しく解釈して、新しい流れを自分で作っていく、素晴らしい才能を持っていた。

ここに天才っていう文字が振ってありますけども、一般に言われる天才型、所謂青白くて何考えているか分からなくて狭いところに閉じこもって考えるってタイプの天才じゃなくて、既成のものを壊すと同時に作り上げていくことを同時にやる。芸術家のタイプは壊すタイプと作るタイプの２つあるんですけど、それを同時にやり遂げようとして見事に成功し成長してゆくわけなんです。

30代になって初めての絵描きらしい生活、それも物のない貧乏のどん底なので、伝説に近いエピソードが一杯あります。お風呂屋から煤を貰ってそれに膠を混ぜて絵を描いただとか、おがくずと胡粉を混ぜて盛り上げたとか、伝説と事実と混ざっております。《カラガンダの印象》（昭和25年第22回青龍展）でしたっけ。頭に瓶を乗せた婦人像が出てますが、色んな話があるからあれについて申し上げますけど、使っているのは絵の具じゃなくておがくずですね。よほど風呂屋さんと親しかったと見えて、煤を貰ったり、おがくず貰ったり色々しています。それに膠を混ぜて絵を描いて。当時の日本画だとそういうのは絵として成り立たないわけですね。もうとんでもない話で。ところがやはり大変な注目を浴びている。非常に機智にも飛んでいるし、無から有、つまり物がないから絵が描けないということなしに前へ、とりあえずある物で描くっていう姿勢から出発している。その内なる精神は結局その生い立ちが、裏日本の何となく今日の空に似た暗い生い立ちみたいなものを背負ってる気がして、独学で10代の後半勉強して、後は軍隊で鍛えられて、そして捕虜生活で洗脳っていうのかな、思想を叩き変えられる、という何重苦も全部切り抜けるんですね。終戦のとき横山さん軍曹だったそうですけど、世界でも非常に強い下士官だったと思います。つまりどういう場面でも設定でも立派に切り抜けて、捕虜生活でも同僚がバタバタ死んでいく中で生き残って、帰って来て「はて、何をしよう」っていうときにやはり絵を描いたっていう感じ。そこが横山さんの凄い、日本画にとってなきゃならないバイタリティっていうのをそこに感じるし、横山さんが描く気持ちになってやってくれたのを有難いってさえ思うんです。横山さんはそういう出発があります。

その時の日本画の状況っていうのを簡単に申し上げます。

日本画っていうのは今日おいでになっている方でも世代が色々ありますから、世代ごとに日本画自体の概念、観念が違うと思いますけど、極簡単にいいますと6世紀、いまから1300年前に中国から唐の文化の最高水準のものとして日本に渡ってくるわけです。紙だとか絵の道具、今振り返ってみても美術史上、世界で最高の水準を保ってるんですよ。日本の文化っていうのはそれまで全く存在しませんで、未開の地に非常に高度なものがいきなり入ってきて、最高の出発の仕方をしている。まぁ、これは日本画に限らない、日本のあらゆる文物がそうなんです。とにかくよその国、よその民族のプリミティブみたいなものが徐々に発展して感染してゆくっていう経過を辿っていないね、日本の文化っていうのは。いきなり最高のものが来る。日本文化は常に時代が下がるという表現をするんですけど、昔のものがいいっていう。これは事実そうなんです。現在のものよりいいっていうことなんですよね。

日本画って呼ばれるのはごく後のことなんですけど、そういう発生を辿りまして、絶えず大陸からの文化があって、それで唐文化が大和絵に変わる、大和絵に変わった頃に鎌倉期ないしはそれ以降に宋元の新しい水墨の技法が来る、そうするとそれを漢画とよんで、本来のものを大和絵という。ですから本来、油絵と日本画っていう同じ絵画なのに何でそんな二元性があるんだろうっていう言い方されますけど、日本の文化は歴史的にみても絶えず二重構造を持ってる。つまり勤めに行く時は洋服着て、家帰ったら浴衣でくつろぐっていうことなんでしょうか。ですからそれを自由に使いこなせる経過を辿って、昭和に来る訳なんです。

（続く）

県立美術館名品200選展スペシャルメニュー

「アーモンドプリンのふるふるパルフェ」

コクのあるアーモンドプリンと、さわやかなミントのジュレ、そしてアーモンドクランチアイスが絶妙な、期間限定の特別メニューです。

Contact

美術館喫茶室 ニホ

[open] 9:00〜19:00
[closed] 月曜日
tel: 0776-43-0310 ＊無料Wi-fi＊
address:
〒910-0017 福井市文京3丁目16-1
福井県立美術館　正面左手

＊美術館が休館でも、
月曜日以外は営業しております。

次回展覧会のお知らせ

開館40周年特別企画展第２弾！「狩野芳崖と四天王 - 近代日本画もうひとつの水脈 - 」

近代日本画の基礎を築いた狩野芳崖門下の4人の高弟、岡倉秋水、岡不崩、高屋肖哲、本多天城。彼らは「芳崖四天王」と称され、開校間もない東京美術学校において一目置かれる存在であったと伝えられています。しかし芳崖の死後、彼らは次第に中央画壇から離れ、教員や本草学者、仏画師など独自の道を歩んでいきました。本展は、彼らに焦点を当てた初の展覧会です。新出作品や未公開資を多数展示し、知られざる四天王の人物像と活動を紹介、芳崖の創った近代日本画の多様な水脈を検証します。

会　期：平成29年**9**月**15**日㈮〜**10**月**22**日㈰

［主 催］福井県立美術館、読売新聞社、美術館連絡協議会　　［共 催］福井放送

狩野芳崖「伏龍羅漢図」当館蔵

本誌は再生紙を使用しています。

編 集／発 行：福井県立美術館　〒910-0017 福井市文京３丁目16-1　tel.0776-25-0452　印 刷：河和田屋印刷株式会社　発行日：平成29年７月10日　17.07.20220